

上演10 2026年7月31日（金）5校目 関東ブロック（埼玉県） 細田学園高等学校 『春子杜』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 土佐女子高等学校（高知県） 寺下 奈那
---	---

「友達」とはただの付き合いではなく、自分自身をも成長させてくれるものである。「春子杜」はそんな友達との優しい絆を描いた作品であった。

主人公であるモモタハルコには、言葉につまってどうしようもなくなった時、いつでもスマートに解決してくれる親友、サクラサクがいる。このまま2人の友情がいつまでも続いていくと信じていた矢先、サクは突然転校してしまう。彼女にもう一度会いたい一心で同じ高校に自分も転校するが、そこは陽キャと陰キャによる激しい抗争が繰り返される危険地帯で、親友を見つけるために奔走する物語である。講評委員からは友達に会いに行くだけの場面を、ここまで複雑かつコミカルに描き、それを出演者が全力で演じ切っていた姿に感動したという意見が多かった。

冒頭からラストまで目を離せない展開で特にコメディ要素がふんだんに盛り込まれており、メタ的で遊び心に富んだ演出が数多く仕掛けられていた。

特に印象的だったのは、やっとの思いで会えたサクに「親友」と認めてもらえなかったことで深く傷ついたハルコが、仙人になる修行を行う場面。心を閉ざして悲しみや寂しさといった感情を無くし、何も感じない「仙人」になろうとすることで、自分の心を守ろうとする様子に胸が締め付けられる思いがした。

芥川龍之介の小説「杜子春」は、主人公が仙人になるための試練の中で我慢できずに言葉を発してしまい、人間であることを選んだ物語だが、今回上演された「春子杜」では人間のままでいるという結末は同じでも、なりたと思う理由に違いがあった。一度人間を捨てたハルコが、このままではダメだと思い直し人間に戻ろうと全力で走り抜けるラストシーンは、観客側も泣きながら笑うというよくわからない感情を抱きながらも見終わった時には爽快感を感じる事ができた。

タイトルについても原作を逆にした読み方になっているが、逆になっているなら「しゅんしと」と読むところをあえて「はること」と読ませている点について討論が交わされた。その中で、「ハルコと」という言葉の響きに重ねて、主人公であるハルコとともに歩み、成長していく物語であることを象徴しているのではないか、という意見が出された。

最後に、印象の残ったセリフとして「あの日の夕日が私の居場所」という意味の言葉があり、今でも忘れられない。過去は無理やり置いていくものではなく、自分の大切な一部として抱えながら前に進んでいいのだというメッセージを感じた。また、仙人になってまで寂しさや悲しさといった感情を無理に忘れようとする必要もなく、その感情も自分を形作る大切なものとして受け入れていいのだというメッセージが込められているように思った。

